

国際交流活動実施報告書

「Passions」EWS in Sri Lanka

期間:2025年10月29日(水) ~ 2025年11月8日(土)

エクスペリメンタル・ワークショップ教員:

アピチャッポン・ウィーラセタクン 特任教授
ムーニー・スザンヌ 准教授
和賀碧 大学院美術研究科助手
EWS主任 久保田 晃弘 教授

スリランカでのサポーター:

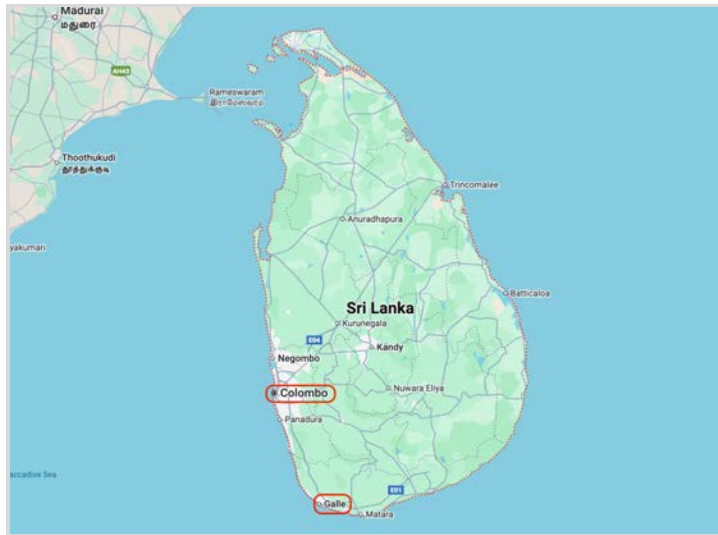
Museum of Modern and Contemporary Art Sri Lanka (MMCA)
Jagath Weerasinghe (芸術家)
Vimukti Jayasundara (映画監督)
University of the Visual and Performing Arts, Faculty of Fine Arts, Colombo, Sri Lanka

スリランカでのコーディネーター:

Onella Perera (MMCA Sri Lanka, Development Assistant)

場所:スリランカ

スリランカの首都Colomboと
南部のGalle



国際交流活動実施報告書

今回の集中ワークショップのテーマは「Passions」であった。

本ワークショップは、昨年和歌山で実施した集中ワークショップに着想を得たものであり、そこでは快適な領域を離れ、新たな快適さを自ら築こうとする強い情熱をもつ多くの人々と出会った。今回も、既存のコンフォートゾーンを越え、自らの情熱を探り出す経験へと踏み出す機会となり、参加者にとっては、創造者として、そして現代を生きる一人の人間としての自己を深める一歩となったと考える。

スリランカという目的地は、近代から古代までの多様な建築、豊かな自然、そして仏教遺跡に満ちていた。これらを参加者全員で探究し、新たな挑戦と経験に向き合う過程を通じて、各自が新たな焦点と情熱を見いだす成果が得られた。

さらに、本集中ワークショップの成果は、来年1月に開催されるセミナーにおいて発表する予定である。また、参加学生それぞれの作品および探究の発展については、来年度を通じて共有していく計画である。今回は、成果を提示する最適な形式として書籍化を検討しており、その実現に向けて準備を進めている。

日程・対象活動

10/29

日本出国

10/30

スリランカに到着



Curado Art Spaceを見学

2023年に設立されたCurado Art Spaceでは、著名な作家から新進気鋭の若手まで、スリランカ人アーティストの作品を扱っており、絵画・彫刻・陶芸など、幅広いジャンルの作品が展示されていた。ギャラリーの運営方針やアーティスト支援の仕組み、展示企画のプロセスなどについて質問を行った。



国際交流活動実施報告書

10/31

午前

06:30から瞑想・ディスカッション

ディスカッションでは、「リアリティとフィクション」、そして「作品と自己の関係」をテーマに、外界をどのように自らの内側を通して体験するのかについて話し合った。自分の心の状態が、どのように現実の捉え方に影響を与えるのかという点にも焦点が当てられた。



COCA Arts 施設見学およびワークショップ体験

CoCAはエコロジーを基盤とし、マインド・社会・環境に結びついた社会的、持続可能なアートにフォーカスをした団体である。講義では、solution-based practicesやparticipatory artの手法が紹介された。例えば、人々がオブジェを寄贈し、それが博物館の資料となる参加型インタラクティブ・ミュージアムの事例などである。"The museum presents objects like they are from a dead culture, but this is a living culture."講義では、参加型のアプローチが従来の物語や表現を問い直し、観客を受動的な鑑賞者ではなく共創者として巻き込む重要性が強調された。こうした手法を通じて、芸術や文化施設は社会的課題に柔軟に応えつつ、参加者自身が文化の中での役割を再考する機会を提供できる。アーティストのスタジオも見学し、知覚のワークショップ“Wakening the Forest Within”に参加した。



国際交流活動実施報告書



午後

コロombo国立博物館 Asoka de Zoysa教授による Memory Walk Tourに参加。

スリランカの複雑な歴史の検証と知識共有を目的とする「歴史対話・記憶のためのコレクティブ (CHDM)」によって企画されたキュレーション・ウォークに参加。
案内役は、ドイツ文学研究者Asoka de Zoysa教授が務めた。

コロombo国立博物館の所蔵品を通して、スリランカと諸外国の歴史的関係や植民地期の交流について学び、理解を深める機会となった。



国際交流活動実施報告書

アーティスト Firi Rahman によるガイド付きウォーク**Slave Island**

首都コロンボの中心フォート地区の南に位置するスレイブ・アイランドは、かつて植民地時代に奴隷たちが住まわされていたことに由来し、現在は多様な民族・宗教の人々が共生する地域となっている。

今回のウォークでは、**Slave Island**の路地を巡り、壁画を見学しつつ地域の歴史や多様な民族構成、住民の生活について説明を受け、都市開発によって失われつつある地域の声・歴史を体感した。



国際交流活動実施報告書

11/01

午前中

06:30から瞑想・ディスカッション

Sapumal Foundationを見学

1940年代に近代的な表現を求めたスリランカの画家たち「43年グループ」のコレクションを鑑賞



スリランカを代表する建築家Geoffrey Bawaの自邸兼アトリエだった「No.11」を見学。

屋内空間と中庭・廊下などの屋外空間が巧みに連続し、建物と自然の境界線を曖昧にする設計がされていた。木材やテラコッタなど、現地の素材や気候に配慮した材料が用いられているほか、Bawaの個人的な収集品もあり、人間と自然そして建築との関係性について考えるきっかけとなった。



国際交流活動実施報告書

午後

Saskia Fernando Galleryにて、スリランカのアーティストPradeep Thalawattaによる'Go Home is Within Me' 展を鑑賞。コロンボを代表する商業ギャラリーで開催された本展では、アーティスト自身による作品解説を通じて、作品制作の背景やコンセプトをより深く理解することができた。

Thalawattaの作品は政治的・社会的なテーマを扱っており、学生たちは彼の作品を通じてスリランカの文化的、社会的、政治的な歴史についての理解を深めることができた。複雑な政治史も、アーティストの作品を通して学ぶことで、より理解しやすく、身近に感じられるものとなった。



スリランカの画家 **Jagath Weerasinghe**のスタジオを見学し、ディスカッションを行った。



“Passion and chaos go together”

今年の初め、Jagath先生はアピチャッポン特任教授と共にオンラインで特別講義を行ったが、今回は彼のスタジオを訪れ、じっくりと対話する機会を得た。

アートオブジェクトの行為主体性や、コンテンポラリーアートへのアプローチに考古学的思考を応用することについて話を伺い、動物の行動や集団行動、人間性について議論した上で、さらにアート制作のアプローチについても意見を交わした。

議論の中で印象に残った言葉の一つは、「Human action can only be explained after the action, Only dictators can explain the action before.」

そして、このワークショップのテーマに関しては、「Passion and chaos go together」と語られた。

国際交流活動実施報告書



11/02

午前中

06:30から瞑想・ディスカッション



私たちが求める“newness”について、そして常に新しいことを試さずにはいられないことについて話す。

ヒンドゥー寺院 **Sri Ponnambalavaneswarar Kovil**を見学

寺院は、スリランカ独立運動に貢献したPonnambalam Mudaliyarにちなんで名付られ、ヒンドゥー教徒のための礼拝の場として建立された。全体が花崗岩のみで造られ、ドラヴィダ建築様式が精巧に再現された独自性の高い寺院であり、学生たちは現地の礼拝方法に従い裸足で参拝を行った。

国際交流活動実施報告書



St .Anthony's Shrine 聖アンソニー教会を見学

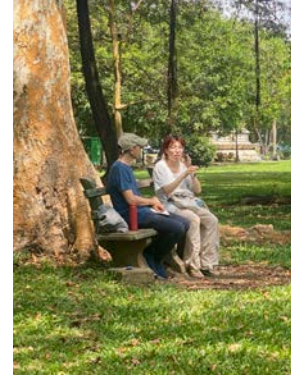
2019年イースター連続爆破テロの被害を受けた場所であり、壁面には今も生々しく銃弾の跡が残っていた。

キリスト教の教会であるにもかかわらず、ムスリム、ヒンドゥー、仏教徒、などを含むさまざまな宗派の参拝者が訪れ、祈りを捧げる様子が印象的で、多くの人々がここには重要な精神的力があると信じていることが伝わってきた。



Viharamahadevi Parkにてクリエイションタイム。アピチャップン教授と個人ミーティングを行う。

国際交流活動実施報告書



スリランカのアーティスト **Barbara Sansoni** が創設した **Barefoot** を見学

1960年代初頭に、スリランカのアーティスト Barbara Sansoni が女性が織物を学ぶためのワークショップのためにデザインを依頼されたことから始まり、Barefoot を創設した。現在はデザイナーがデザインや原材料を提供し、工場などはもたず職人が制作し品質に責任を持つという仕組みで運営されている。手織り製品を販売するショップや書店の他、ギャラリーやカフェも併設した複合的な空間となっている。

午後

Vimukti Jayasundara 氏の家

映画監督 **Vimukti Jayasundara** 氏の家にて、「Passions」をテーマにしたディスカッションを行った後、Community Cooking Class に参加し、伝統的なスリランカ料理の調理を体験した。ディスカッションの中で、Vimukti 氏は自身がどのように映画制作への情熱を抱くようになったのか、そして人生の悲劇的な出来事を経ていったん映画の世界から離れ、仏教に専念する道を選んだ経緯を共有してくれた。さらに、のちに再び映画制作へと戻ることになった理由や背景についても語ってくれた。夕食後は、映画監督の家の庭で学生の作品を投影し、スクリーニングと発表、ディスカッションを行った。



国際交流活動実施報告書



11/03

午前中

06:30から瞑想・ディスカッション

コロンボを出発し、南部へ移動 **Lunuganga Dedduwa Bentota**へ



午後

Lunugangaは、建築家Geoffrey Bawaが独立記念日にゴム・シナモンのプランテーションがあった土地を購入し手がけた邸宅・庭園である。

国際交流活動実施報告書

現地の植生や気候を活かしつつ西洋の様式や近代建築が融合された庭園を巡り、さらに邸宅内に残る家具や彫刻、調度品なども見学した。建築と自然、記憶と現代性、植民地の過去と独立後のアイデンティティについて改めて意識する機会となった。



Ariapala Mask Museum

Ambalangoda villageに代々受け継がれているスリランカの伝統舞踊や宗教儀式で使われる仮面のコレクションや制作工房を見学した。仮面の彫刻や彩色のさまざまな工程を見学し、伝統的な人形劇のデモンストレーションも体験した。職人たちの技術や、仮面が舞踊や儀式の中で果たす役割についても詳しく学ぶことができ、地域の文化や歴史への理解を深める貴重な機会となった。

国際交流活動実施報告書



夕方にSri Yoga Shalaに到着した。



このヨガセンターはジャングルの中に位置しており、朝になると仏教のchantingやイスラム教のcall to prayer、そしてジャングルの鳥や動物の音が響き渡る。都会の喧騒が続くコロンボとの対比が印象的で、静けさの中で心身を落ち着ける特別な空間だった。

国際交流活動実施報告書

11/04

午前

6:30から、ヨガ講師によるヨガセッション



Sooriya Weaving Mill

スリランカ南部にある伝統的な染色・手織り工場を見学し、実際に糸を紡いで機織り機で生地を織る体験をした。

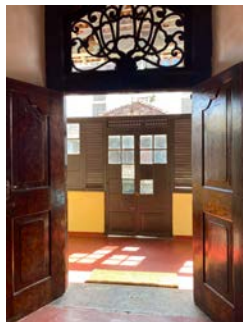


午後

国際交流活動実施報告書

Galle Fort

スリランカ南部の港町ゴールに築かれた要塞と、その城壁内に形成された旧市街を見学。ゴール要塞の成り立ちの歴史やスリランカとの政治的・地理的關係性について説明を受けたほか、建築には植民地時代の影響が色濃く残っており、歴史を視覚的に感じられる場所であった。また、ツアーガイドはこの地域に長い家族の歴史を持ち、個人的なエピソードや地域の歴史、さらには国全体の歴史を織り交ぜながら解説してくれた。



国際交流活動実施報告書



Japanese Peace Pagoda

1947年、日本の仏教僧・藤井日達は、平和の象徴として世界各地に平和塔 (Peace Pagoda) を建立することを生涯の使命とした。スリランカのルンマサラの丘に建つ平和塔は、内戦の続く2005年に建立され、紛争地に平和の寺院をつくるという彼の構想の一環である。これまでに、ヨーロッパ、アジア、アメリカ合衆国など世界各地で80以上の平和塔が建てられている。

この平和塔を訪れることは、学びと体験が続く慌ただしい一日の終わりに、静かに内省するひとときをもたらしてくれた。



11/05

午前

06:30から、ヨガ講師によるヨガセッション

朝は、ヨガ講師によるガイド付きのプレスワーク・ヨガセッションから始まった。

出発前には、アピチャップン特任教授との個別ミーティングの時間も設けられた。その後、マーティン・ウィクラマシンハ民俗博物館へ向かった。

国際交流活動実施報告書



マーティン・ウィクラマシンハ民俗博物館

スリランカ近代文学作家、マーティン・ウィクラマシンハの生家を含む4つの建物で構成された民族博物館を見学。

館内では、伝統的な文字体系や農業、工芸、道具、非常に多様な伝統衣装について学んだ。また、スリランカで最も多作かつ高く評価されている作家で、英語での出版も含めほぼ100冊近くの著作を残したマーティン・ウィクラマシンハについても詳しく知ることができた。



国際交流活動実施報告書

マスク・ペインティングワークショップ

スリランカの伝統的な仮面を彩色するワークショップに参加。

伝統的な仮面の使われ方や意味についての説明を受け、さらに伝統音楽の演奏も聴くことができた。その後、参加者一人ひとりが自分の仮面を彩色する指導を受け、制作のプロセスを体験した。

ワークショップを通じて、単に技術を学ぶだけでなく、仮面が舞踊や儀式の中で果たす文化的・宗教的な役割への理解も深めることができた。



国際交流活動実施報告書

午後

Kabalana ビーチで、クリエイションタイム。合間にアピチャップン教授と学生個人ミーティングを行う。



夕食後、チベットや南アジアの伝統的な楽器によるサウンド・ヒーリングジャーニーに参加。スリランカでは、サウンドヒーリングは長い歴史をもち、宗教・文化的伝統と深く結びついている。仏教やヒンドゥーの儀式でも広く用いられ、太鼓のリズムや詠唱は深いリラクゼーションと内的静寂を促す。

儀式用の太鼓やシンギングボウルなど独自の楽器によって身体の自然な周波数に共鳴する音が生み出され、癒しや精神的覚醒をもたらすと考えられている。



11/06

午前

06:45からヨガ講師によるヨガセッション。

国際交流活動実施報告書

ヨガセッションのあと、コロomboへ戻る前に、これまでのワークショップを振り返るディスカッションを行った。学生と教員は、

- ・ワークショップの中でさまざまな「家」を訪れたこと
 - ・構造と自由のバランスについて
 - ・トラウマへの向き合い方を多く学んだこと
 - ・携帯電話やSNSにほとんど時間を使わなかったこと
 - ・室内と屋外をつなぐように常に窓が開いていたこと
- など、多くの点について意見を共有した。

クリエーションタイム。合間にアピチャップン教授と学生の個人ミーティングを実施。

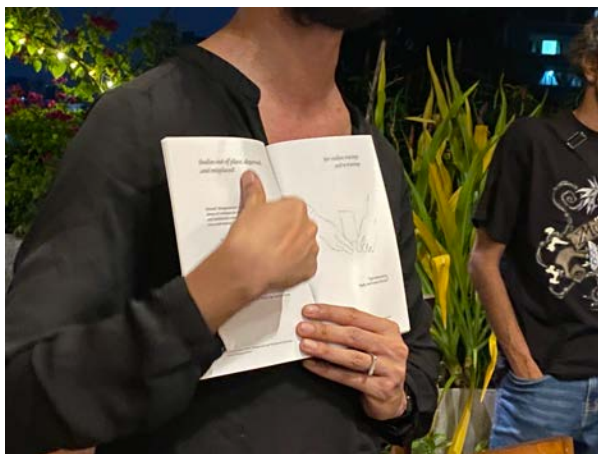


南部を出発し、首都コロomboへ移動。

午後
アート・コレクティブ **The Packet**のアーティストと交流

国際交流活動実施報告書

The Packet (2019年設立) は、作家・編集者・アーティストらと有機的に関わりながら、Zineやアートブック、ポストカードなどを組み合わせた出版物を制作するアートコレクティブ。スリランカ出身のアーティストたちによって構成されている。ハイパーローカリティ、協働的プロセス、対話に特に焦点を当てながら、アーティスト出版物 The Packet を制作するために8人のアーティストが集まったことを起点として発展してきた。実際に彼らが手がけた作品を見ながら、彼らの活動の特徴や日本での美術館・ギャラリーシステム構造について対話をした。



11/07

午前

06:30から瞑想・ディスカッション

国際交流活動実施報告書

最後の朝の瞑想とディスカッションの時間であった。

この時間では、The Packetの活動方法や、自分の作品を信頼できる人と共有することの重要性について振り返った。一人で創作することがあっても、相談できる相手や打ち明けられる人を持つことは大切である。

私たちは、自分の情熱について話し合った。中でも、芸術制作への情熱については、感情からの動機、他者からの刺激、制作を通じて得られる自信、そして個人的表現からより広い世界とのつながりへと変化していく過程など、さまざまな理由が挙げられた。中には、制作と自己のアイデンティティが切り離せない話す学生もいた。

"Art is not only about making something, but how we live."

"Art is a companion."

"I want to create something interesting, not beautiful."

University of Fine Artsを見学。

美術学部さまざまな学科を見学し、施設を実際に訪れることで、スリランカの学生たちが制作に取り組む様子を間近で見ることができた。学生たちは彼らと直接対話し、制作に対するアプローチや大学の学びの文化について質問や意見交換を行った。こうした交流を通じて、異なる教育環境や創作プロセスへの理解を深める貴重な機会となった。



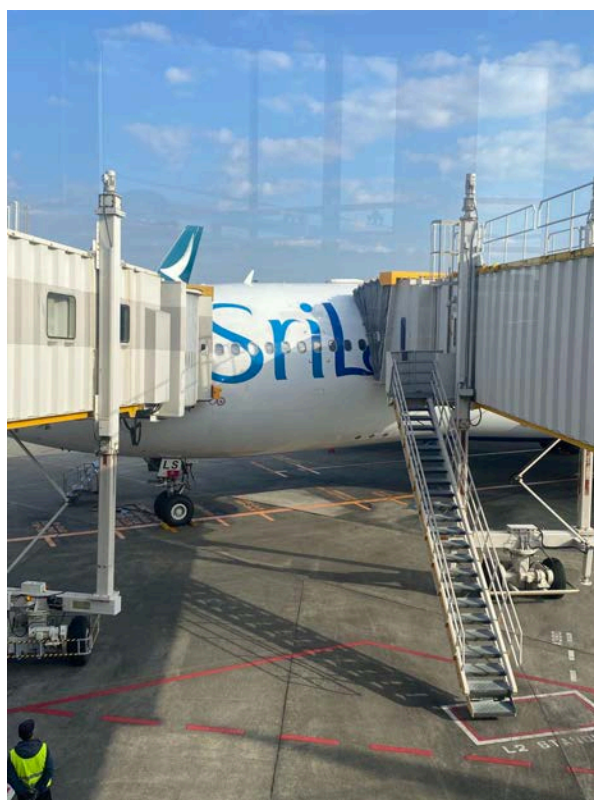
Museum of Modern and Contemporary Art (MMCA)にて、女性建築家 Minnette De Silva によるスリランカの公営住宅建築に関するアーカイブ資料などを見学。De SilvaはTropical Modernismの重要な役割を果たし、地域性を取り入れたモダン建築の実験的手法を追求した建築家であり、Geoffrey Bawaよりも10年早くこの手法で活動を始めたことでも知られる。117件のプロジェクトを手がけたことがこれまでに確認されている。

国際交流活動実施報告書

MMCAは現在、常設の美術館建築の整備を進めている段階であり、現時点ではアーカイブ作業や出版、期間限定の展覧会などに力を入れている。私たちは、アーカイブの資料を見学し、その内容や背景について丁寧な解説を受けた。



午後 帰国



スリランカの近代史は、16世紀から1948年までのヨーロッパ植民地支配と、植民地時代に生まれた民族間の緊張に根ざした26年間の内戦(1983～2009年)によって形作られました。1972年、セイロンは共和国となり、国名をスリランカに改めました。仏教が国の宗教として優先される一方で、タミル少数派との対立も生じました。

国際交流活動実施報告書

21世紀に入っても戦争は続き、和平交渉は難航しました。また、2003年の洪水や2004年の津波などの自然災害で多くの命が失われ、沿岸地域は壊滅的な被害を受けました。2009年に戦争は終結したものの、戦争犯罪や行方不明者の問題は未解決であり、2016年には6万5,000人が今なお行方不明であることが政府によって初めて認められました。さらに、2019年のイースター自爆テロでは350人以上が命を失い、2019～2024年の経済危機も国に大きな困難をもたらしました。

こうした困難な状況の後でも、現地を訪れ人々と接すると、深い調和が感じられます。シンハラ語、タミル語、英語の三言語が街中にあふれ、仏教の象徴が目立つ一方で、教会やモスクも共存する風景が広がっています。

波乱の歴史にもかかわらず、スリランカは壮大な自然美に恵まれています。豊かなジャングルや茶畑、輝く海岸線、多様な野生動物が息づくこの国は、まさに自然の宝庫です。また、ダンス、音楽、工芸、祭りなどの文化が日常生活に深く根付いており、古代からの遺産が今も生きています。そして何より、人々の温かさが際立ちます。訪れる人々に対して非常に歓迎的で寛大、協力的であり、その優しさは心に深く残ります。

スリランカで多くの人々、アーティストたち含めて、と出会い話をする中で、まだ癒しの途上にあるポストコンフリクトの国であることが感じられました。しかし、多くの国々が対立や戦争の方向に向かう中で、この多民族国家は平和を優先する道を歩んでいます。ここには学ぶべきことが多くあります。

この文化の体験、その深いルーツと日常生活への浸透、は、現地で直接体験して初めて真に理解できるものです。色彩豊かなテキスタイルや食文化、建築空間の感覚的体験、そして都市と自然の両方にあふれる音の世界は、訪れる者にとって新鮮で鮮やかであり、深く魅了されます。このワークショップを通して、学生たちは情熱をもって生きる人々に出会い、自らの情熱を見つめ直す機会を得ました。彼らはともに、この一生に一度の貴重な体験に没頭し、これをアーティストやデザイナーとしての今後の活動に活かしていくことでしょう。